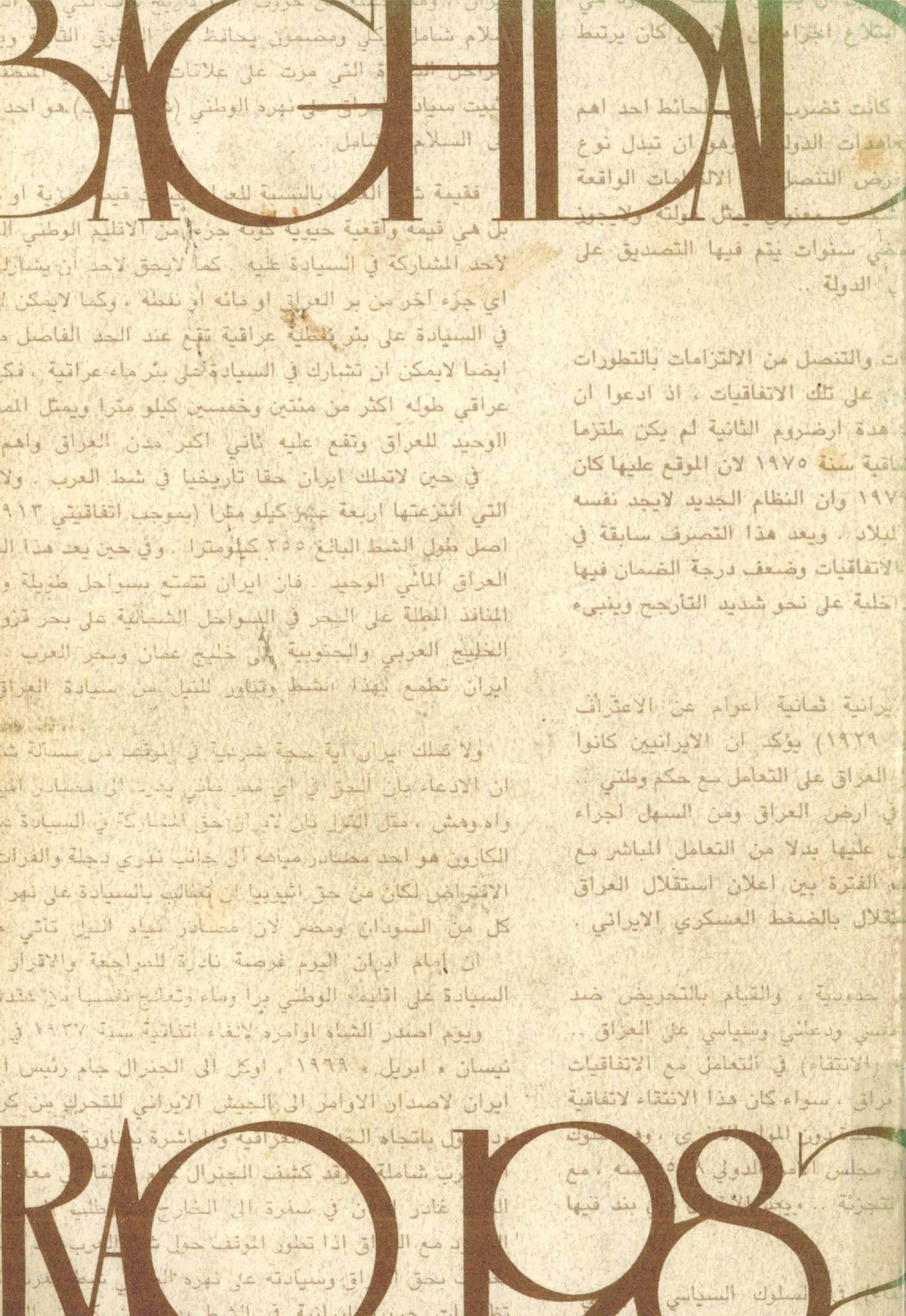




الاراق، وقد كانت حروب العراق في
سلام شامل لكي ومضمون يحافظ على الترتيب الشار و
مراسل الصداقة التي مرت على علاقات بين بين المصن
تبيت سيادة العراق على نهره الوطني (الفرات) هو واحد
في السلام شامل

فقيمة شاملة بالنسبة للعراق، فقيمة قديمة قديمة او
بل هي قيمة واقعية حيوية كونه جزءاً من الاقليم الوطني
لاحد المشاركة في السيادة عليه . كما لايجوز لاحد ان يتنازل
اي جزء آخر من بر العراق او مائه او نفطه . وكما لايمكن
في السيادة على بحر قزوين عراقية تقع عند الحد الفاصل
ايضا لايمكن ان يتشارك في السيادة على بحر قزوين عراقية ، فك
عراقي طوله اكثر من مئتين وخمسين كيلو مترا ويمثل الممر
الوحيد للعراق وتقع عليه ثاني اكبر مدن العراق واهم
في حين لا تملك ايران حقا تاريخيا في شط العرب . ولا
التي انتزعتها اربعة عشر كيلو مترا (بموجب اتفاقيتي ١٩١٣
اصل طول الشط البالغ ٢٥٥ كيلو مترا . وفي حين يعد هذا
العراق المائي الوحيد . فان ايران تتمتع بسواحل طويلة و
المنافذ المطلة على البحر في السواحل الشمالية على بحر قزو
الخليج العربي والجنوبية على خليج عمان وبحر العرب
ايران تطمع بهذا الشط وتطالب للنيل من سيادة العراق

ولا تملك ايران أية حجة شرعية في الموقف من مسألة شط
ان الادعاء بان الحق في اي ممر مائي يمر الى مصادر المياه
وامدها . مثل القول بان ايران احق المشاركة في السيادة على
الكارون هو احد مصادر مياهه الى جانب نهرى دجلة والفرات
الاقتراض لكان من حق اثيوبيا ان تقابل بالسيادة على نهر
كل من السودان ومصر لان مصادر مياه النيل تأتي
ان اتمام ايران اليوم غرضه نادرة للمراجعة والاقرار
السيادة على اقليمه الوطني براء وماء وتعالج نفسها من شدة
ويوم اصدر الشاه اوامر لانقاء اتفاقية سنة ١٩٣٧ في
نيسان ١٩٦٩ . اوكل الى الجنرال جام رئيس
ايران لاصدار الاوامر الى الجيش الايراني للتحرير من ك

من قبل باتجاه الجنوب العراقي والمباشرة بمناورة
رب شاملة وقد كشف الجنرال جام في لقاء مع
الجنرال غدار في سفرة الى الخارج في طلب
الحد مع العراق اذا تطور الموقف حول شط العرب
حق العراق وسيادته على نهره المائي شط العرب
تطالب ايران بالسيادة في الشط العربي

بتلاع اجرام من الارض كان يرتبط
كانت تضرب راس الحائط احد اهم
مهمات الدولة وهو ان تبذل نوع
فرض التنصل من الالزامات الواقعة
على معنى يمثل دولته ولايجوز
في سنوات يتم فيها التصديق على
في الدولة ..

ات والتنصل من الالتزامات بالتطورات
على تلك الاتفاقيات ، اذ ادعوا ان
هذه ارضروم الثانية لم يكن ملتزما
ساقية سنة ١٩٧٥ لان الموقع عليها كان
١٩٧٧ وان النظام الجديد لايجد نفسه
البلاد . ويعد هذا التصرف سابقة في
الاتفاقيات وضعف درجة الضمان فيها
اخلة على نحو شديد التارجح وينبئ

ايرانية ثمانية اعوام عن الاعتراف
١٩٢٩) يؤكد ان الايرانيين كانوا
العراق على التعامل مع حكم وطني
في ارض العراق ومن السهل اجراء
من عليها بدلا من التعامل المباشر مع
في الفترة بين اعلان استقلال العراق
استقلال بالضغط العسكري الايراني .

في حدودية ، والقيام بالتجريض ضد
السياسي ودعائي وسياسي على العراق
في الانتقاء) في التعامل مع الاتفاقيات
عراق . سواء كان هذا الانتقاء لاتفاقية
بين الدولتين ، وفي حوك
البرلمان الدولي في سنة ١٩٥٥ مع
تجربة .. وبعد الانسحاب من بند فيها

في سلوك السياسي

BAGHDAD

バグダッド憂囚

商社マン・獄中の608日

吉松安弘

新潮社

IRAQ 1982

著者紹介

1933年東京生れ。東京大学卒業。東宝に入社
映画監督、脚本家。1976年文化庁芸術家在外
研修員としてニューヨーク大学に学ぶ。1985
年より帝京大学で教える。

監督作品に「陽のあたる坂道」「神様なぜ愛
にも国境があるの」など。

著書に「東條英機 暗殺の夏」(新潮社刊)「や
さしい天使たち——ぼくのおかしな世界股旅
記」(PHP刊) などがある。



バグダッド憂^{ゆうしゅう} 罫

—商社マン・獄中の608日—

1989年11月20日 発行

1990年10月15日 7刷

著者 ^{よしまつやすひろ} 吉松安弘

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

〒162 東京都新宿区矢来町71／振替東京4—808

電話・業務部03(266)5111・編集部03(266)5411

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 大口製本株式会社

© Yasuhiro Yoshimatsu 1989, Printed in Japan

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-351403-5 C0095

価格はカバーに表示してあります。

目次

バグダッド	——一九八一年大晦日の前々日	5
東京	——同年十月九日	9
バグダッド	——同年十二月	63
秘密警察獄房	——一九八二年正月	109
革命評議会裁判所	——同年三月	181
アブグレイブ刑務所・国事犯棟	——同年七月	237
アブグレイブ刑務所・外人棟 ^{エフライジユ}	——一九八三年正月	293
外人棟 ^{エフライジユ} ——バグダッド	——同年六月	359
バグダッド——東京	——同年八月	385
あとがき		407

バグダッド憂囚

―― 商社マン・獄中の608日 ――

バグダッド——一九八一年大晦日の前々日

「ミスター、あなたは日本人ですか？」

出国のためのビザを取って、イラク政府の出入国管理局レジデンス・オフィスから出てきた赤尾は、不意に声をかけられた。

振り返ると、スーツを着た体格のいいアラブ紳士がにこやかに立っている。

「ええ、日本人ですが？」

「あなた、第一通商ゼネラル・マネジャーの、アカオ・ソスケさんですか？」
流暢な英語だった。

「そうですよ……でも、どうして御存知？」

「ちょっとお話があるのですが、そこまで来ていただけませんか？」

「何の用です？」

「いや、或る人に会って頂きたいので、こちらだと聞いてお迎えにあがったのです。どうぞ、その車にお乗り下さい」

ゲートの傍に黒塗りの車がとまっており、やはりスーツを着た男が後部座席の扉をあけて、赤尾に会釈した。二人とも、丁重な物腰だった。

突然の話に不安を感じた赤尾はあたりを見廻した。役所のまわりには手続きを待つ多勢の人がたむろし、そのうちの何人かが、無表情のままこちらを見ていた。

「どこに行くのです」

「すぐ近くですから時間はとらせません。さあ、どうぞお乗り下さい」

（どうするか……）

車も立派だし、連中の身なりもいい。もしかすると、仕事のことで誰か大物が、内密の話でも持ってくるのだろうか。いやそれとも、へんな話に巻き込んで俺を陥れようとしているのか。

赤尾は迷った。

ただ、こんなに多勢の人間がいるなかの立ち話で押問答となったり、みんなの注目を集めるようなトラブルを起すことは、したくなかった。ましてやここは、出入国を扱う役所の構内だ。面倒なことになって、明日の便で発てなくなったりしたら、せっかくの正月を日本で過せなくなる。

相手の言葉に不審はあるが、車に乗ってから問いただせばいいか……。

（とにかく、ここを出よう。明日、飛行機に乗るまでは、静かにしていなくてはいけません）

赤尾が車の方に歩みよると、車の傍にいた男が「さあ、どうぞ」と案内し、そのあとから自分に乗った。最初話しかけてきた男は反対側のドアをあけ、赤尾を押すようにして乗りこんできた。

車はすぐに動き出し、門衛に遮断機をあけさせて大通りに出ると、スピードを上げた。

赤尾は後部座席の真中で、二人の頑丈な男にはさまれる形になっていた。助手席にももう一人、これもスーツの男がいて、素知らぬ振りて前を向いている。

「あなたたちは、どこの人なんです？」

「私たちは、あなたをお連れするように頼まれているんですよ」

「私に会いたいというのは誰なんですか」

「お会いになれば、わかります」

物腰はあくまで丁重だが、肝心の質問には、なに一つ具体的に答えなかった。

「あなたは、イラクにどのくらい滞在されました？」

両隣りの男は、話題を四方山話に変えようとしていた。

「バグダッドの生活は、楽しいものでしたか？」

「日本は今、とても寒いのでしょねえ」

笑顔で次々と出される質問に、仕方なく答えながら赤尾は、なにかの場合に備えて車の行先をしつかり覚えておこうと、通り過ぎてゆく街並を見張っていた。

左手前方に、煮えたつ油の瓶びんをかついだモルギアナの彫像が見えてくる。アリババ・スクエアだ。車はロータリーを四分の一だけ廻ると右折し、次を左折した。ニダールの通りに入ったのだ。右手に大きな建物が見えてくる。

（あれはたしか、サハラホテルというのではなかったか……）

赤尾は振り返ってサハラの看板を確認し、頭を戻した時、おかしいことが起った。赤尾の頭に、突然、両側から力が加わり、頭が下に押えつけられたのである。

なにが起ったのか、わけがわからなかったが、それにしても凄い力だった。

赤尾は押されて頭を下げ、更に押されて背中を丸くし、身体ごと前に倒されてゆくと、そのまま両膝の間に頭を突っこみ、目の前に床を見つめるような格好にされてしまった。

エンジンか、タイヤか、ごうごうという音が間近に聞えた。

両側にいた男たちが、渾身の力で赤尾を押えつけているのである。二人とも無言だった。

赤尾は身もだえしてその手を撥ねのけようとしたが、両腕を逆手にとられ、深く腰を折った格好では力が入らず、頭を押える連中の手は硬くて、鋼はがねのようだった。

どうしようもなかった。

起き上がることは出来ないし、胸を圧迫されたこの姿勢では声も出せない。もはや、どこを走っているかもわからなかった。赤尾は焦った。

（いったい、どうしたんだ！　これは何なのだ！）

東 京——同年十月九日

1

この未明、季節はずれの熱帯性低気圧が走り去った関東南部では、夜明けまで降っていた強い雨が上がり、太陽が昇るにつれて秋らしい青空がひろがっていった。

夜来の雨雲を散らした風は次第に強くなって、京王プラザホテルを七時四十分に出た成田空港行リムジンバスも、湾岸道路に入るとその北風を真横からうけ、車体のあおられるのが乗客にさえ感じられた。

客は少なく、二人の白人男性と、台湾あたりからの観光客らしい中年の男女が五人。日本人は、一番前の席に並んだ、赤尾宗輔と京子の夫婦だけである。

第一通商・機械プラント本部プラント第一部に勤務する赤尾は、海外出張に出かけるところだった。深大寺の自宅からハイヤーで新宿まで来た彼らは、プラザホテル前でバスに乗り換えたのである。

今年に入ってから社の社内通達で、九大商社のひとつにランクされる第一通商でも、部長補佐クラスの海外出張の送りは都内のエア・ターミナルまで。成田までのハイヤーは面倒をみなかった。経費節約である。

この朝、高速道路は空^すいていて、いつもなら二時間と少しかかるバスが、九時半には空港に入^いった。空港は、拡張工事反対派の襲撃に備える特別警戒期間にあたっており、入口の検問ではパスポートのない京子が身元証明を求められたものの、意地の悪い詮索はなく、夫婦ともに、旅立ちを占^うう不吉な兆^{きざし}しを感じることもなかった。

北ウィングの、日本航空カウンターを借りて応対するイラク航空で、バグダッド行四四二便のチエック・インを済^すませたが、搭乗までにはまだ時間がある。夫婦はロビーに並んだレストランをいくつか物色すると、寿司の「京樽」に入り、特上のちらしを注文し日本酒を熱くしてもらった。宗輔にとって、これから当分の間、日本料理の飲み食いとはお別れである。しかし、それが思ってもみないような長さになるうとは、二人とも気がついていなかった。

「お酒が美味しいわ」

妻が夫を見つめながら言った。

京子が酒を飲むのは珍しかった。ビールならともかく、日本酒を、しかも昼間から飲むのは稀有^{けう}のことといつてよい。

「眠くなったら困るから、もう止めよう」

盃を伏せようとする妻に、夫は優しい言葉をかけ、酌をした。

「かまわないさ。帰りのリムジンは新宿まで寝ていればいいんだ」

普通感覚で言えば、今度のイラク行はかなり異常な任務であり、危険な出張であつた。兵士でも、ジャーナリストでも、外交官でもなく、一サラリーマンにしか過ぎない人間が、戦争の真只中の土地に派遣されるのである。

総合商社批判の盛んな一昔前、その組織や人間を揶揄して「日本株式会社の尖兵」という表現が

あったが、弾丸の飛び交う国に行く赤尾の場合、それは比喩でも洒落でもない。

そうかといって、このような情況に飛び込んでいって商売に励むのが、日本商社の専売というわけではなかった。戦火を交えているイラクにもイランにも、沢山の外国人ビジネスマンが往来して活発な営業活動を競っていた。ヨーロッパの国々、東欧、南米、アラブ、アジア、彼らは、資本主義の国からも社会主義の国からも来ていた。

戦争をやってゆくには、莫大な費用を投じて物資と設備を調達しなければならないし、戦争が終れば惨禍の復興が始まり、これにも大きな出資が予想される。

戦争こそ金儲けのチャンスとして武器を売りこむ「死の商人」もいるが、生活のための物資を売り国内開発の設備をつくる商人にとっても、戦争が限定的でさえあれば、時には平和以上に商売になる。特に、新規の市場参入をしようという営業マンにとって、戦争による情況の流動と変化はチャンスだ。

ましてやイラク政府は「戦争遂行と経済開発の同時推進」をスローガンに国民を引張っており、事実、戦争が始まってからもイラク政府・公団による物資や建設工事の発注は活発だったのである。一九八〇年九月二十二日にイラン・イラク戦争が始まってからちょうど一年。国境協定破棄を宣言して攻め入ったイラク軍は、開戦当初の攻勢によってイラン領を大きく占拠したが、間もなく進撃を阻まれて戦線は膠着、ようやく反攻を始めたイラン軍に対して、戦略的防御の態勢を固めて対峙していた。

開戦当初に盛んだった両国空軍による首都空襲の応酬も、このところ絶えて行なわれず、戦闘が沈静化している上に、戦争を仕掛けたイラクのサダム・フセイン大統領は電撃戦による短期決着の思惑が崩れて、いまや「休戦の用意あり」と声明、政治交渉による収拾の希望をあらわに示していた。

こうなると、戦争終結の期待も加わって「数百億ドルの復興需要が望める」との報道も流され、豊富な石油埋蔵量を誇るこの国のオイル・マネーを求めて、世界中のビジネスマンが戦火の危険をおして集まるのは、また当然であった。

こういった状況を踏まえている赤尾には、戦場にとびこんでゆく、といった悲壮感はもちろん、戦争の巻添えをくう危険についてのさし迫った意識もなかった。外国への出張は、行先がどこであろうと、政治情勢がどうあろうと、日本とちがつて危険がある。これまでの経験からそれは心得ていたし、今度のイラク行も、それ以上のものではないと見ていた。

心構えがいつもの出張と違わなかったから、あとになって赤尾は、不思議に思うことがあった。（あの時に限って、何故、京子は見送りに来てくれたのだろう。なにか、女に特有の予感でもあったのだろうか……）

これまで外国出張は何回もあったが、京子が成田まで見送りに来るのは初めてだった。

今度の出張ではもう一つ、あとになって不思議に思うことがあった。出張を耳にした赤尾の母親千代が、彼の第二人に呼びかけ、三人連名でお金を包んでくれたのである。

下町育ちの人らしく、「お餞別」と上書きした熨斗袋のしやうぶくろに手の切れるような一万円札が三枚。こんなことも初めてだった。

（自分の事をいちばん気に掛けてくれている二人の女性が、二人共に、この時に限って普段とちがう行動をした偶然の暗合は、やはり、なにかの靈感が働いたと思わざるを得ない）

夫婦が再会を果たしたのちの或る日、赤尾はこのことを京子にただしたことがある。

「あの時はあなたが、来ないか、と誘ったのじゃなかった？ 見送って欲しいと言ったのよ」
京子は興味なさそうに答えたが、赤尾がそんなことを言うはずはなかった。

イラク駐在員へのお土産に、「京梅」でばっつて、たと太巻寿司を何本も包ませた赤尾は、十一時になったのを見て席を立った。

ロビーに出ると、十二時発バグダッド行最終搭乗案内のアナウンスが聞えてきた。イラク航空は通常の出国より早く、出発一時間前にゲートに来るよう呼びかけていたのである。

「気をつけて」

「それじゃ」

短く言葉を交し合い、搭乗口への階段を降りながら赤尾は、抱き合わないまでも手ぐらい握るのだったな、と思った。下まで降りた時に視線を感じて振り返ると、階段の上に小さく立つ京子の表情は、厳しく、怒っているように見えた。

飛行機に乗るまでの検査は厳重を極めた。

陽気にふざけている香港行の団体客にまじってパスポート審査を終え、表示に従いひとり一番端のサテライトまで行くと、ここには数人の空港保安係が厳しい表情で並んでおり、入念に身体をさわられたすえに財布までのぞかれる。その上、手荷物として持っていたカバンやカメラはすべて取り上げられて厚手のビニール袋に放りこまれ、強制的に乗務員預りとさせられた。原則として、パスポートと財布以外は小さい機内に持込みを認めない、と言うのである。

赤尾の手許に残ったのは、ケースから出されてむき出しになった歯ブラシ一本。あとは、強硬に抗議して取り戻したファイル・ノート一冊だけ。

「格好つかねえなあ」

歯ブラシとノートを両手に持って歩きながら、赤尾は呟いた。

指定のあった十六番ゲートは、直接機内に導かれる蛇腹通路ではなく、人気のない階段を降り

た下にある、地上への出口だった。

ここでも、待ちかまえていたイラク人の係員からもう一度、身体検査をされ、股間にまで手をつっこまれて凶器の有無を確かめられた。これほどの厳しいチェックは、彼の経験でも、日本赤軍による乱射事件がおきたあとのイスラエル・テルアビブ空港ぐらいなものだ。

やっと解放され、ゲートの出口でバスを待つ赤尾に、イラク航空の世話をしているJALの制服の男が、同情するような微笑を向けた。

「想像を絶するセキュリティでしょう」

バスは、空港の中をだいぶ走っていった。胴体をオリーブグリーンと白の二色に塗り分け、尾翼に黒い鳥を描いたイラク航空のボーイング七四七は、草原の只中といったような所に翼を休めていた。成田空港の端の端なのだろう。機体の緑は、イスラムで神聖とされる色であり、イスラム教を国教とするイラクのナショナル・カラーでもある。

その翼の下、雨上がりで水溜りも残る滑走路には、さっきカウンターで預けた乗客達の雑多な荷物が全部、じかにばらばらと並べられていた。乗客に、もう一度自分の荷物を確認させるのだった。もし、持ち主不明の荷物があればそれは要注意で、誰かが紛れこませた時限爆弾の可能性もある。持ち主が乗客にいれば問題はないものとみなすのだが、もちろんこの用心も、自爆覚悟の特攻ゲリラには通用しない。

自分の荷物を探し出して差し示す乗客の挙動をうかがうかのように、先刻、ロビーのカウンターにいた偉そうな口髭男以下、数人のイラク人係員が周りを取り囲んでいる。赤尾は以前、アラブゲリラに狙われたルフトハンザ航空が、同じ方法の保安措置^{チエック}をしていたのに出会ったことはあるが、平和な日本で、このような光景を見るのは、なんとも異様だった。

海の彼方の戦場が、いわばイラク機とともに、この成田空港の端にまで伸びてきているのである。